BUNGEI OG NETWORK TSUSHIN

文芸OGネットワーク通信

vol.22

〒101 - 8437　東京都千代田区一ツ橋 2-2-1　共立女子大学文芸メディア研究室内　文芸OGネットワーク
Tel & Fax 03-3237-2681　URL www.kyoritsu-wu.ac.jp/bungei
代表　高橋 京子　発行：2015.3.28

共立祭参加

2014年度の共立祭が、10月18日（土）、19日（日）の両日、共立女子大学神田キャンパスを会場にして開かれた。

今回のテーマは「共立！なでしこ革命」。

頑張って課題に取り組んでいる「なでしこ」の姿が各会場で見られた。

本館校舎の地下１階、１～６階、３号館１階、３～４階では、各サークルの展示と発表があり、特に学部のゼミの発表は大学の授業を垣間見るようで、興味深いものがあった。また、毎年行っている、桂由美さん（卒業生）のブライダルショーが、今回も催された。

本館ロビーでは、合奏、合唱、各種ダンス、ファッションショー、ミス共立女子コンテストなど、隙間なくイベントが繰り広げられ、華やかな雰囲気に満ちあふれ、大勢の来観者でにぎわった。共立講堂でもイベントが行われたが、中高生の使用が中心のため、大学生の使用の時間は制約を受けたようだ。

文芸OGネットは今回も参加した。会場は３号館402号室。展示は「近松門左衛門」をテーマにポスターや説明のパネルを壁周囲に立てかけ、壁面に寄せたカウンターテーブルに関連のパンフレットやチラシを展示した。これらは、同じ３号館の５階にある劇芸術資料整理室でOGネットが日ごろ整理を進めている資料の中から選び抜いたものである。

また、同時に「在学生支援」の活動報告のパネル、「文芸OGネットワーク通信」のバックナンバーが展示された。会場の中ほどには茶菓を準備して来観者を迎えるテーブルが用意され、歓談する人々でくつろいだ雰囲気をかもしだしていた。その横には、バザーのコーナーが設けられた。バザーの品はOGネットの会員の有志の方々によって寄付されたもので、バザーの収益は、85,600円であった。これは、OGネットの今後の活動資金に当てられる。

共立祭参加
展示は近松門左衛門

共立祭の前の２週間は連続で週末に台風が襲来しましたが、当日は晴天に恵まれ、本館は盛況の様子でした。OG ネットは昨年までの本館の教室ではなく、今年は、校舎の一部建て替えという事情もあり、３号館の４階での発表となりましたので、予想はしていましたが来場者はかなり少なくなりました。

もっとも、３号館は文芸学部のあった懐かしい校舎ではありました。しかしながら、やはり欲を言えばもう少し賑やかであったら、というのが正直なところです。

発表のほうは今回も意気盛んに致しました。昨年は、河竹黙阿弥をテーマとして取り上げました。２年連続の歌舞伎関係となりましたが、今回は近松門左衛門を取り上げました。

江戸文化がしっかり固まってきた時期に活動した近松は、以後のストーリー性、人の感情の細やかな機微など、近代へつながる演劇の基を作ったといってもよい存在だと思います。

それを示すように、歌舞伎だけでなく（歌舞伎は苦手という方でも歌舞伎以外で、文学座や蜷川幸雄演出等で御覧になった方も多いはずです）、現代風に脚色したものも多く、上演回数も多いので資料も結構ありました。

会場が不便な場所ではありましたが、それにもかかわらず、入江先生、近藤先生、鈴木先生には展示を御覧下さいまして感謝申し上げます。

OG ネットの資料整理は週に一度の活動で、しかも夏、冬、春と学校閉鎖期間には活動ができませんので、１年でそんなに多くの時間をかけているわけではありません。その中で、私共でできるだけの発表を行ってまいりました。OG ネットの存在を知っていただくためにも、このような展示をこれからも続けて行きたいと思っています。

終わってみると未熟なところだらけですが、これからも皆様どうぞ御支援くださいますよう、お願いいたします。

川瀬治子（S52 卒）

劇芸術資料室から

平成 25 年秋に名古屋で開かれた演劇学会に出席したことは、通信 20 号にすでに述べたのだが、そこで興味ある発表にであったことをお伝えしたい。立命館大学・情報理工学部教授による「無形文化財のデジタル・アーカイブ」と題する発表である。立命館大学アート・リサーチセンター（1998 年設立）は文理連携研究センターとして絵画、古文書、建築、彫刻などの有形文化財にとどまらず、舞踊、芸能などの無形文化財のデジタル化を行っている。OG ネットが関わっている演劇資料整理のなかで、ポスターを撮影し、その情報をコンピューターにとりこむ作業は、さしずめ共立女子大学有形文化財のアーカイブ化、ということになろうか。

立命館大学が行っている「舞踊のデジタル・アーカイブ化」は次のようである。人体は基本的には骨格と関節で構成され、たとえば、肩が回れば肘や手首はそれにつれて動くという身体構造に着目し、演者の体の各部に磁気センサーや、光を当てると反射するマーカーをつけて身体運動を計測し、記録し、３次元ＣＧで再現するのである。それによって、「舞踊の特徴的部分動作の抽出」、「身体動作データのインデックス作成、類似検索」、「長い身体動作を簡潔に表現する」ことなどが可能となるらしい。３次元の記録というからには、たとえば、「肘は肩から何度の角度でもちあげ、そのまま何秒間停止し、同じ姿勢で何センチ前進する」というように身体動作が数値化されるのであろうか、というのがデジタル知識にうとい筆者の貧弱な理解である。舞踊などの芸事の継承は、生身の人間から人間へ真似ることによって伝承されるもの、と思っているのだが、デジタル化は、単なる記録以上の何かをもたらすのであろうか。

多田久惠（Ｓ 45 院卒）

連載 私の学生時代 ―文芸学部で学んだ日々⑧―

my school days

今回は、「60 年安保」の年に入学され、新しい校舎建設中に大学生活を送られた文芸学部日本文学専攻の８期生碓井弘子さんと、英文学専攻の８期生伊藤陽志江さんに書いていただきました。

人の記憶や思い出は全く恣意的なもので、他と共有するものは余り多くない。昭和 35 年入学の８期生が通った旧文芸校舎は２階建てで床は歩くたびにギシギシ音をたてた。その後建て直しの仮校舎も、現在の中高校舎の校庭にあり勿論木造２階建て。石炭ストーブのなんとも風雅な校舎であった。夏の暑さは何とか凌いでも、冬のボールペンを握る手の冷たさは耐え難かった。受講中もコートを膝掛にし、手袋も手放せなかった。ストーブの火が弱まると「先生石炭を足して下さい」と、今考えると失礼極まりない声が飛んだりした。

８期生は、入学時「60 年安保」の年で、毎日のようにデモへの参加勧誘があり、一人一人の政治意識が試された。法学担当の教授から「この大切な時期に呑気に聴きにきていて、君らはどうかしている」と詰められて「そういう先生が講義をされているのは何故ですか」と厳しい応酬があったのを思い出した。休校も多く、このときばかりと映画館の人になったり本屋街をうろついたりした。時折は研究室にお邪魔して、教室では伺えない貴重なお話しをお聞きし、刺激を受けた。サークル活動での友人関係。他大学との読書会。自治会活動。文化祭の運営。４年間「一炊の夢」のごとき素早さですぎた。全国津々浦々から神田神保町の一角に集って４年間の青春を過ごしたことは、それぞれの人生の中の忘れ難い時間であろう。日常の中にその体験や感情は埋れ火のように、奥深く仕舞われて、時折ひょっこりと顔を出して、苦いものや甘味なものを紡ぎはじめる。

東京の街の変化は凄まじい。共立も然り。林立するビル群を見上げても昔の建物や空間を思い出せなくなっているものも多い。わずかに残る面影を辿ることもしばしばあるが、感傷とは違う。やはり 72 歳という現実を生きている。

卒業の時ある人がこう言っていた。「私はこの共立での４年間があったから、この先の人生どんなものであっても、幸福に生きていけると思う」と。

碓井弘子（S39卒）

my school days

私が英米文学科に入学した昭和35年の文芸学部は仮校舎でした。後に壁面に飛天が舞う新築の校舎になり、明るく広い学食も人気がありました。* また、音響効果抜群の共立講堂は小澤征爾さんや人気の指揮者のコンサートで長蛇の列でした。

私たちの学生時代は、池田勇人首相が所得倍増を掲げて高度成長へと突き進んだ時代で、悲願の東京オリンピックを４年後に控えて日本中が夢や活力に満ちた時期でした。２年生になる春休み、友人４人と２週間かけ、神戸港から別府に出て、南国情緒や異国の香り漂う九州を一周しました。場所が思い出せないのですが、ある夜遅く着いて朝起きると、旅館の前はお墓で、早々に出発したりしながらも「広い日本」を実感しました。

翌年、私を含めて短大から３名と関西から１名の４人の学生が４年制に編入学しました。単位数が違うために取り直しで、ほぼ毎日の授業でしたが、たまに休講があると皆元気になり、４人揃って後楽園のスケート場や、人気絶頂のアラン・ドロンの映画など３本立てを入れ替え無しで３回も見て、ボーとなって帰ったこともありました。

シェークスピアは、最高権威の福原麟太郎先生の講義を受けました。作品の何幕何場のセリフは今かかっている歌舞伎の出し物のセリフと同じなので観るように、とのことで出かけた記憶はあるのですが、それが何だったか残念ながら思い出せません。人生の教訓だったかもしれません。外山弥生先生や朱牟田房子先生にはバージニア・ウルフを教わりました。必須科目の日本文学で習ったことは後年、日本語学校の講師になった時に役に立ち、その学生たちに刺激を受け、52 歳の時に英国へ短期留学をしました。エイボン川沿いに建つシェークスピア作品の像を見、福原先生はこの偉大な作家と何を語ったのだろうと思ったものです。

伊藤陽志江（旧姓：小沢）（S39卒）

*文芸学部新校舎（３号館）は昭和 38（1963）年に完成した。（『共立女子大学文芸学部50年誌』より）

free space

今回は、現役生が初登場です。昨夏、OGネットと在学生がコラボして制作した、高校生向けの広報誌『We♥共立』で編集長を務めた白石朱音さん（家政学部被服学科3年）に、現役共立生の日常や思いを綴ってもらいました。

私の水曜日

8時半起床。寝ぼけ眼で朝ごはんを食べ、母がつくってくれた弁当を持ち、9時半には家を出る。都内にある実家からは1時間弱で大学に着くため、10時50分開始の2限には余裕で間に合う。ちなみに、前期の水曜2限は鈴木国男先生の「芸術の世界」だった。あの授業を受けた人の中で宝塚に魅せられなかった人はいないだろうなぁ。そんなことを考えながら後期の水曜2限を受ける。（後期の授業がつまらないわけではない。）

2限が終わると、9階ラウンジにて高層マンションと学士会館を眺めながら友達とご飯。3限の空き時間は課題などの作成時間に充て（と言いながら友達と喋り続けていることが多々…）、4限は家庭科教員免許取得のための授業。4限が終わればアルバイトへ。

私は神保町の寿司屋「すし庄」で働いている。バイト仲間は皆共立生で、大将は他大学の学生アルバイトも雇ったことがあるのだが、共立生は特に真面目で性格が優しいと褒めてくださる。

共立の卒業生でもある被服学科の田中先生は、「昔から共立生は優しくて親切な人ばかり」と話してくださった。確かに、友達は皆穏やかで親切で、課題で分からないところがあれば丁寧に教えてくれたり、一緒に考えてくれる。また、国際学部の西村先生は「共立は創立から

ずっとこの場所にあり、火事や震災に見舞われても、不死鳥のように蘇る」とおっしゃっていた。大学の形は変わっても、学生の人柄は今も昔も変わっていない。共立に入学できたことは私の誇りだ。あと約1年で卒業してしまうのが、本当に寂しく感じられる今日この頃である。

白石朱音（家政学部3年）

イラスト提供　家政学部1年 岩田美桜さん

掲示板

INFORMATION

OGネットワーク総会
　日時　6月6日（土）10：30～
　場所　共立女子大本館
文芸サロン講座：13：30～
　講師　内田保廣氏（文芸学部教授）
　演題　「江戸の面影ー浅草から江戸の遊び場ー」

ぜひご参加ください。

編集後記

EDITOR'S NOTE

今回、「free space」に初めて現役の大学生が原稿を書いてくれました。若い世代の考えていることや感じていることを知ることができる良い機会となれば…と思います。

今後も、幅広く原稿を依頼し、内容の濃い、親しみのある会報にしていきたいと考えています。（O）